



Title	ヘルマン・ヘッセと第1次世界大戦：芸術家の政治的使命の進化論的定位置
Author(s)	高橋, 修
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 103-117
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25953
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P103-117.pdf



ヘルマン・ヘッセと第1次世界大戦

—芸術家の政治的使命の進化論的定位—

高橋 修

1916年3月9日昼、ヘッセはベルン郊外の自宅を後にしてドイツへ向う¹⁾。

その前日は慌ただしい一日だった。前年来携わっている、在フランスドイツ人捕虜への図書供給事業は、雑務が多く、無給であるのみならず、運転資金そのものも知己を頼る等して収集しなければならない有様で、そのために朗読会を開いて収益を利用することも度々だった。この日も、翌日ヴィンタートゥーアで朗読会を開くためにチューリヒまで出かけてきたのだった。チューリヒで、かなりの無駄足も踏みながら公私の用事を片付けることに半日を費やす。夕方、ヴィンタートゥーア行きの列車に乗り込むべく駅まで来てみると、なんとそこにはその日捜しあぐねた親友、作曲家のオトマール・シェックが待っているではないか。ヘッセは不吉な予感に打たれる。彼を待っていたのは、ベルンを経由してシェックのもとに伝えられた、父ヨハネス・ヘッセの死の報せだった。

シュトゥットガルト近郊のコルンタールに居住する父の許へは、チューリヒからなら一直線に国境を越えて向って行くことができる。だが、戦争中のこと故それがそう簡単には行かない。ヘッセは8日のうちにまずベルンの自宅へ戻り、9日の午前はパスポートを手配するために役所を駆け回る羽目になる。じりじりと待ち続けるうちに、次第に彼の心の中には、その日頃振り回されていたとは別の、もうひとつの現実が息を吹き返し始める。父の死顔が心の目の前に迫って来るのである。

昼頃漸く目的を果たして帰宅し、妻が整えた荷物を手にして彼は家を後にする。その日の内にコルンタールに着ける見込みはもうない。しかし行けるところまでは行って夜を明かそうと心に決めて。

* * *

振り返れば、1914年8月にドイツが参戦して以来、全ヨーロッパを巻き込んだこの大事件にヘッセも翻弄されてきた。

まず彼の心を領したのは、やはり、ドイツ人としてのドイツ支援の熱い思いであった。8月29日に国民軍に採用されるべく志願しているが、これは彼の強度の近視等の理由で受理されなかった²⁾。10月にもシュトゥットガルトで名乗り出るが再び拒否され、ベルンに戻って後

当地のドイツ大使館に非軍事的な活動への奉仕を申し出るのである³⁾。思想的にも彼は当時広くドイツ人の観念を支配していた「イギリスに代表される汚れた資本主義対ドイツ精神の戦い」という一種の聖戦意識を共有していた⁴⁾。戦争は常人の心に倫理的な好影響を与えるという思想にも一応同意しており⁵⁾、外国の新聞に載せられたドイツ批判の文章に躍起になって反論し国際世論に影響を与えようとした⁶⁾。ドイツの戦争詩の伝統に立脚し、皇帝を讃え勝利を願う詩作品まで残している⁷⁾。このように、何らかの貢献をしなければ気が済まない思いに囚われていた彼にドイツ大使館より与えられた機会が、フランス等で捕虜となったドイツ兵のために中立国スイスから書物を中心とする物資を供給する仕事だったのである⁸⁾。そういう彼の立場からすると、平和主義運動を繰り広げる人々の言動も批判の対象となり得る。戦争のこの凄惨な現実に対して最も緊急になすべきことをせず、空虚な理想論ばかり振り回しているというのである（これに関しては後述）。

にもかかわらず、彼の心の中にはもうひとつの大きな底流がある。1914年10月上旬から彼は2週間程をかけてシュトゥットガルトを中心にドイツ国内を回っているが、そこで見聞した戦争の実情は彼を大きく揺さぶる。人々が「偉大な時代」に酔うためにこれだけの犠牲が払われているということが果たして正気の沙汰なのかどうか⁹⁾。この疑念はドイツ文化界における空気の変化に接するとさらに増幅される。ある雑誌がこれからはもう敵国の作品を批評の対象にしないように要請してきたのだが¹⁰⁾、そういう考え方に対してヘッセは不満の感想をもらさざるを得ない心境となるのである。

10月半ばの時点でこの戦争に対する彼の基本的な立場はもう確立されている。それを彼は1914年11月3日、『おお友よ、この調べにあらず』（*O Freunde, nicht diese Töne!*）¹¹⁾という論説として公に表明するのである。ここで彼が取り上げているのは純粹に芸術家・文化人の使命の問題である。戦場にある人は今は銃を撃つよりない。だが、普段超国家的人類文化の建設に携わっている我々芸術家・文化人の使命は、自分の本分を忘れて戦争を煽りたてることではないはずだ。我々は精神の領域をしっかりと守り、戦後ヨーロッパにおいての相互理解・平和の樹立が成就しやすいように基盤を確保すべきではないか。

大戦争を目のあたりにしての当惑・内的矛盾を彼は非常に大きな思想の輪のなかに包み込もうとした。ドイツへの愛情を心に抱きつつ、しかしそれは人類への愛情へと通じて行くべきものであることを信じ、「外的生活が要求するものを、可能なかぎり果たさなければならない役割のようなものとして引き受け、しかしいつでも神の近くに留まり自分が全被造物と一体であることを忘れないでいること」¹²⁾を理想として掲げたのである。

雄々しい正論であり、このような思想を守り通したことがヘッセの政治的見識の確かさの証ともされる。だがここで彼は、自分自身まだ解決の見通しを持ち得ていないある大きな問題に、単純すぎる抽象的な表現を与えてしまっているようである。それは、芸術家と社会の

関係の問題であり、彼が仕えるという「精神」が人類史に対していかなる関係に立つかの問題であるといっても良い。『ペーター・カーメンツィント』(1902～3年執筆)以来諦念を主調とする人生観の中に生き、実社会の流れからは距離を取ったところに芸術の場を確保しようとしてきたヘッセ。そうした生活の停滞の澱みの中から何とか身を振りほどかねばという悲壮な決意を『ロスハルデ』(1912～13年執筆)で描いてみたものの、それが自らの生にどういう展開を与えるかについてはまだ殆ど先の見通しが立っていなかった段階で、彼は芸術家・文化人は人類共通の理想のために貢献すべきだという大きな要請を打ち建てたわけなのである。

誠実な気持ちから率直な発言をただけのつもりだったのであろう。にもかかわらず彼が発言を重ねるにつれ、沸騰する戦時世論の刃は彼にも切っ先を向け始める。彼としては、長期間捕虜として過ごさねばならず精神的空白に耐えかねている人々の身の上を案じ、可能なかぎりの教育・娯楽的配慮を以て捕虜用図書を集集し発送する事業において、時局に対しても、自らの良心に対しても申し開きできる足場を確保しているつもりである。だが、それを勘案した上で彼の言説を評価してくれるような冷静な批評家は殆ど存在せず、多くの非難・罵倒を浴びせられる中で彼は消耗して行くことになる。非難の材料とされた要素として、大まかに次のような点を拾い上げてみる事が出来る。①『おお友よ、この調べにあらず』(1914年11月3日、前述)で戦争を煽る文化人を批判したこと(しかしこの論説は当時は殆ど注目されない)、②『芸術家より兵士へ』(『Der Künstler an die Krieger』、1914年12月執筆の詩)¹³⁾で、死と対峙し運命を直視する兵士たちに、君たちも日頃運命と格闘している芸術家と同じ体験領域にやってきたと、見下した印象を与える語り方をしたこと、③デンマーク人 Sven Lange への私信で「ドイツが武器によってのみではなく、平和と国家を超えたヒューマニティーの業でも敬意を起こされるよう期待する」と述べたのがデンマークの新聞に引用され、ドイツに対する裏切り行為の印象を与えたこと¹⁴⁾、④『ドイツ再訪』(『Wieder in Deutschland』、1915年10月10日『Neue Zürcher Zeitung』に掲載)¹⁵⁾で、うまく立ち回って兵役を逃れた、と受け取れる表現をしたこと。これらが戦争推進派によって取り上げられ、特に1915年秋から批判が強まり、11月上旬頃にはヘッセの側でも友人たちの力も借りて自己弁護に追われることになる¹⁶⁾。一方、⑤『ベルンからの便り』(『Brief aus Bern』、1915年10月13日『Frankfurter Zeitung』に掲載)¹⁷⁾や、『平和主義者に』(『Den Pazifisten』、1915年11月7日、ウィーンの『Die Zeit』に掲載)¹⁸⁾では前述したような視点からの平和主義者批判を行っており、こちら側からも執拗な反論を受けることになる。

これらの一つ一つについてももちろんヘッセの側にも言い分がある。しかし元々彼の思想は、「人類の未来にとっての重大な課題は傑出した個人によってのみ根本的な推進が得られるものであり、大衆の組織によってではない」¹⁹⁾という形の選民思想のようなものが横たわってお

り（だからこそ、彼が『おお友よ、この調べにあらず』で扱ったのは芸術家・文化人の使命であり、大衆のそれではなかったと考え得るわけだが）、どこまで論を尽くしたとて、戦争の熱に煽られている一般民衆とも、平和運動を展開する大衆組織とも、その間にある溝は埋めようのないものだったのではないだろうか。こうして彼は両方に敵を持ちつつ新聞・雑誌を舞台に論戦を続け、公務も多忙を極め、心身共に疲弊しきった状態で1916年3月を迎えるのである。

* * *

自らを支える上で他には替えがたい足場であった捕虜事業でさえ、どこかに自己欺瞞が混ざっていることを彼は内心否定できないでいる²⁰⁾。そこへ彼を襲った父の死の打撃は彼のそうした外的な自己保存装置を破壊し尽くしてしまった。3月9日、前日往復したチューリヒを過ぎ、今日朗読会をするはずだったヴィンターツアーも通過し、ボーデン湖を船でフリードリヒスハーフェンへ渡ったところで夜を明かす。次の日も早朝から列車を乗り継ぎ、目的地に近付くにつれ、彼の想念は父の像の周りに開けるもうひとつの現実へと向って一直線に引き寄せられて行く。彼同様、兄弟姉妹が父の柩に引き寄せられて行くのが見え、また、最後に訪問したときの殆ど目の見えなくなった、しかし平和そうな聖者のような父の面影がよみがえってくる。そんな父に対して、忙しくて落ち着いて手紙も書けないという何ともつれない言い訳の葉書が最後の便りになってしまった……………。

久しぶりに集まった兄弟姉妹は、父の遺体を中心として、それからの数日をまるで宗教的な儀式のようにして過ごす。父の手記を読み上げつつ皆で過去を回想しあい、時々その場を外して遺体を安置してある部屋に赴き瞑想に耽る。完成としての、祝祭としての、そして解放としての死、そしてその彼方へ開ける精神の領域の予感に身を委ねつつ、この敬虔派の伝道者の家系の末裔ヘルマン・ヘッセは、自分が表面上それに反抗しようとも、深いところではやはり同じ精神を共有していることを確認するのである。

こうして日常の世界から突然引き離され、超時代的な精神の領域の門前へと引き戻されたことの動揺は決定的であり、数年来彼の内面にわだかまっていた様々な矛盾が一気に噴出する。3月16日に彼は一応ベルンに戻るが²¹⁾、再び公務に溶け込むことは出来ず、休暇を取って3週間ほどロカルノとブルネンで休養する²²⁾。しかしその成果は殆どなく、より根本的な解決を求めて4月下旬から5月末までルツェルンに滞在して電気療法等を試み、またそこで出会った精神分析医ラングの治療を受けるのである。再びベルンに戻ってからも、翌年11月までに約60回ラングの許に通っている²³⁾。

* * *

ラングの許での分析がどのように進化したかについてはあまり深入りすることは出来ないが、ここまでの記述の多くを負っているエッセイ(『Zum Gedächtnis』)²³が、単に父の死を追悼するのみの目的で書かれたのではなかったことには注意を払っておきたい。父の死に際しての経過を、その報せを受け取った事情から始めて、旅行中の細々とした出来事、またそれに伴う微妙な心理の動きまで克明に書き留めたこの短篇は、自らが精神的にくずおれるにあたってのある重大な一局面を観察対象にするための、治療目的に沿った習作であった筈だ。まず彼は自己の内面の現況調査から取り掛かったわけである。

このような営みから派生した最も体系的な成果は、『メルヒェン』として1919年に出版された短篇群であろう。『メルヒェン』には精神分析との出会い以前の作品も含まれているわけだが、その内の『笛の夢』は1916年5月18日付けの私信の中で、「この2年半の私の内的状況は、ちょうどそこに書かれているような具合なのです」と触れられている²⁴。その他の作品にしても、治療のための内的凝視と共鳴し合うものを持っていたが故にこの時期に再び想起されたのであろうし、そしてその延長線上に明らかに精神分析を実験的に応用し、創作であるのみならず治療的な目的を持った作品が書き継がれて行ったのである²⁵。しかし、これらの短篇群をヘッセは本物の納得できる作品とみなしてはおらず、1917年7月になってもまだ彼は「新たに創作に戻るときには新しい高められた要求をかざして」になるであろうと述べている²⁶。

ところで、こうした内界の現況調査がまさに進行しつつある1916年夏頃から、書簡等のなかに進化論を下敷きとしたような発言が目立ち始める。個人史の内省の底に、個人を超えた心象との出会いを確信し始めているのである。結論めいたことから先に言ってしまうと、この進化論的ヴィジョンを基に内界を再統合なし得たことが、ヘッセに世界へと向って行く新たな足場を与えたと思われる。以下でヘッセの進化論的ヴィジョンの特徴について考察を進めるが、彼は決して精神分析から直接に自己蘇生法の解答を貰い受けてきたのではなく、それまで空想の作業を通して内面に育んできたものを、精神分析により与えられた自信をもとに、もっと大胆に展開しなおしたのであることは、押さえておかねばなるまい²⁷。

内面の凝視の底から生物進化の流れを象徴するような宇宙論的幻視に達するという契機はヘッセ文学の中にそれ以前から存在している。例えば、詩集の1903～10年の部の終わり近くに収められている『夜の行軍の途上で』²⁸などでは魂(Seele)が超越的なものの呼び声に応じて群れをなして前進して行く様が描かれており、この時期の進化論的象徴界との対応を考えるとほっとさせられるものがあるし、そもそもヘッセにとって詩作とは、その最初期からすでに、内界を探索して超越的なもののヴィジョンに迫ろうとする要素を含むものだったのである。しかし、この第1次大戦期ほどヘッセがそれを明確に進化論の枠に当てはめて表現

したことは他にはない。

だがそもそも、人間が自己の内界を観察することによって、どのような仕方で進化論への裏付けが得られるというのだろうか。ヘッセは『芸術家と精神分析』(»Künstler und Psychoanalyse«, 1918年7月)²⁹⁾の中で次のように語っている。自分自身に対して正直になり、抑圧していたものを直視するようになると、人は慣習から切り離されて孤独になるが……

Dafür aber sieht oder ahnt er mehr und mehr hinter den zusammenfallenden Kulissen des Herkommens das unerbittliche Bild der Wahrheit aufsteigen, der Natur. Denn nur in der intensiven Selbstprüfung der Analyse wird ein Stück Entwicklungsgeschichte wirklich erlebt und mit dem blutenden Gefühl durchdrungen. Über Vater und Mutter, über Bauer und Nomade, über Affe und Fisch zurück wird Herkunft, Gebundenheit und Hoffnung des Menschen nirgends so ernst, so erschütternd erlebt wie in einer ernsthaften Psychoanalyse.³⁰⁾

だがその代わり彼は、自分の出生の由来が描かれている書き割りが崩れて行き、その背後に真実・自然の仮借なき姿が次第に浮かび上がってくるのを見る(あるいは予感する)のだ。というのは、分析における徹底的な自己吟味の中でのみ、発生史的一幕を本当に体験し、それを生々しい感情で満たすことが出来るのである。父母を通り越し、農民と遊牧民を通り越し、猿や魚も通り越して遡り、人間の起源と宿痾と希望とが最も真剣で衝撃的なものとして体験されるのは何をも措いてまず真剣な精神分析においてなのである。

つまりヘッセは、人間の内面には生物進化の歴史が刻まれており、然るべき仕方でそれを観察すれば生々しいほどのリアルさで追体験出来る、と主張しているのである。

ところで、進化というものはすべての個体が均等に関わるような類のものとは考えられず、ヘッセによれば、保守的に種を保存する役割を担う者と、先遣された歩哨の使命を担い未来の可能性を切り開いて行く者がいる。この枠組みに彼は自らの政治観を重ね合わせ、前者を通常の間人・集団をなして行動する大衆、後者を自分に与えられた運命を把握しており、人類の精神に仕える芸術家・文化人に対応させるのである³¹⁾。

これらの目覚めた人々の使命は、実現性があるかどうかなどはおかまいなしに新しい理念・理想を創出することである。「汝殺すなかれ」が世紀を超えて人間の心に光を与え続けているように、たとえ実現不可能であろうともそうした理念こそが人類史を創造的に展開させ得るのである³²⁾。しかしこのような主張は現実への堅実な働きかけの可能性を殆ど無視するものであり、ヴァルター・ラーテナウからは「靈的二ヒリズム」として批判されている³³⁾。

このような進化の歩みの前線に立つための方法は、内面への道を歩み、自己自身の内に運

命を告げ知らせる声を聞くことである。これは『デミアン』(1917年9～10月執筆)や『ツァラトストラの再来』(1919年1月執筆)の中心をなすテーマでもあり、それによれば、我々一人一人は自然が進化の大河へ向って投じた試みの一石であり、その使命を悟りそれに徹することこそ、自らの運命をわがままなまでに貫徹することこそ、人類進化に尽くす最良の道だということである。

だが、そのような内面の声を聞き最高の認識に達するとはどういう出来事なのだろうか……………。

Wer es erlebt, dem wird der Feind zum Bruder, der Tod zur Geburt, die Schmach zur Ehre, Unglück zu Schicksal. (...) Mit der Erfahrung, daß all dies «Äußere» nicht nur Gegenstand unserer Wahrnehmung, sondern zugleich Schöpfung unserer Seele ist, mit der Verwandlung des Äußeren in das Innere, der Welt in das Ich, beginnt das Tagen.³⁴⁾

それを体験した者にとっては、敵は兄弟となり、死は誕生となり、恥辱は名誉、不幸は運命となる。(・・・) これらすべての「外的」なものが我々の知覚の対象であるのみならず同時に我々の心の創造物であることを経験し、外的なものを内的なものに、世界を自己へと変貌させることによって夜は明け始めるのである。

外的なものと内的なものは実は通底しあっており、マクロコスモスとミクロコスモスを同心円上に置いてその自由な交流を可能に出来たとき初めて、人は全体史の中に位置付けられた自己の使命を知り得るわけである。

もうひとつ例を引いておこう。この時期のヘッセの、かなり精神分析の影響に寄り掛かって発想されている内面探求を最も率直に表現しているエッセイとして『ことば』(1917年)³⁵⁾がある。そこでは、詩人の道具としてのことばの不完全さを嘆きつつも、抑圧を脱して心の深淵の「無意識」の領域にまで至ればそれが克服されることが述べられている。

Weilt er diesseits, auf der bekannten Tagesseite, wo auch der Bürger wohnt, dann drückt die Armut aller Sprachen unendlich auf ihn, und Dichter zu sein, scheint ihm ein dorniges Leben. Ist er aber drüben, im Seelenland, dann fließt Wort um Wort ihm zauberhaft aus allen Winden zu, Sterne tönen und Gebirge lächeln, und die Welt ist vollkommen und ist Gottes Sprache, darin kein Wort und Buchstabe fehlt, wo alles gesagt werden kann, wo alles klingt, wo alles erlöst ist.³⁶⁾

彼(芸術家)がこちら側、お馴染みの、一般人も暮らしている昼間の側にいる間は、あらゆることばの貧しさが限りなく彼を圧迫し、詩人であることはかれには茨の人生と感じられるのだ。しかし向こう側、魂の国に行くと、あらゆる片隅から単語たちが巡り合いながら彼

に向って魔法のようにそよいできて、星が響きを発し山は微笑み、世界は完璧であり、神のことばとなっており、そこには不足している単語や字母はなく、すべてが言い表わされ得、すべてが響きを発し、すべては呪いを解かれている。

物象化し固化した日常性の仮面の下に、本来それを生み出し裏付けたのであろう自由な世界が広がっている。そこではすべてはことばとして、つまり、響き・感情・生き生きした表現を発する象徴力を持つものとして現れ出るのであり、しかも変幻自在である。内面の声を聞き自らの運命を洞察できるようになるべき人においては、このような次元が実現されなければならない、というのである。

* * *

ところでここで強調したいのは、このような進化論的ヴィジョンの定立は単に世界観・人生観を掘り下げるための倫理的探求として行なわれているのではなく、現実の政治に対処するにあたってヘッセ自身が自己の立つべき足場を求めるといふ、具体的な動機と裏合わせに行なわれたということである。

前述したように、大戦前半期に既にヘッセは政治に関わることは芸術家の使命ではないと認めて、芸術家・文化人として世界精神に仕える方途を探っており、ところが一方では政治を未来へ向って正しく導くのは大衆運動ではなく傑出した個人であるという見解を取っている。これでは精神の次元と大衆の次元とは全く接点を持たなくなるわけだが、この矛盾を彼は進化論的枠組みの中で解消しようとするのである。つまり、大衆は自己保存のために生命を失った既存の秩序に固執するのに対し、芸術家・文化人は進歩へと向って先遣された人類の先駆けであり、現状で実現の可能性があろうがあるまいが未来への道を切り開く理想・理念を立てる使命を担うのである。

(...) ich empfinde mich und andre Schriftsteller, Künstler etc. als Fühler und vorge-schobene Posten der Menschheit, welche zuerst das werdende Neue wittern. Sie sprechen es aus, auch wenn noch niemand dran glauben mag, auch wenn sie selber es noch nicht zu verwirklichen wissen. (...) Ich glaube an die Macht der Idee, denn eine Idee ist für mich nicht ein Hirngespinnst, sondern ein Vorausfühlen, eine Zukunftsahnung der Menschheit.³⁷⁾

僕は自分自身も他の作家・芸術家等の人々も人類の触手であり先遣された歩哨だと感じている。彼らが最初に生成しつつある新しいものを嗅ぎ付けるんだ。そして彼らはそれを表明する、たとえまだ誰もそれを信じようがなく、彼ら自身まだそれが実現できるのかどうかわ

からなくても。(・・・) 僕は理念の力を信じるんだ、僕にとっては理念は頭の中で紡ぎだしたに過ぎないようなものではなく、人類の未来についての予感なのだからね。

そして彼はこの、たとえ非現実的であろうとも理念を打ち建てるという、一種無責任流とも取れる政治的領域への働き掛けを実行に移すのである。その最も明瞭な例は1919年1月に執筆され匿名で発刊された『ツァラトストラの再来』であり、また、『デミアン』（1917年9～10月執筆、1919年6月出版）をも含め1917年11月以来エーミール・シンクレアの名で断続的に発表された執筆活動なのである。これらの作品においてヘッセは、集団をなして動く人々へのあからさまな罵倒をも含め、まさに「未来の人類のための理念を打ち立てる」作業に自ら率先して着手しているのである。1916年春から1917秋まで、1年半にわたってヘッセは公へ向っての発言を行なっておらず、その沈黙を破った時にヘッセの文章に生じていたトーンの変化をミレックは現実政治への悲観と内面化の進行という視点のみから描いているが³⁸⁾、それはヘッセの社会に対する自己定位の変化を見落とした見解と言わざるを得ない。他方でミヒェルスはヘッセの政治に対する新しい態度を捕虜事業こそがその実践であるようなヒューマニズムの思想として捉えているが³⁹⁾、それではヘッセが自らの使命として感じるものの可能性をも危険性をも見落とすことになる。再び社会に向って発言し始めたヘッセには明らかに、現実政治を直接動かすことは出来ずとも読者の魂に働き掛け、ヨーロッパに、ひいてはヨーロッパに蹂躪されている世界全体に未来を切り開こうとする積極的な意志があった。また、そこに表現された思想はいわゆる「平和主義」の理想とは根本的に異質な英雄主義的要素も含んでいたのである⁴⁰⁾。

一方、1917年12月30日に新聞に掲載された『平和になるだろうか』⁴¹⁾のように、大胆に今こそ和平をと叫んだ、現実政治の流れに密着した発言もあるが、こちらの方は「立場上ふさわしくない」との理由で以後政治的な傾向の著作を禁じられると、それほど逆らいもせずに発言を慎んでいる⁴²⁾。また、1918年11月にはキール暴動やミュンヘン革命が波及して敗戦ドイツが大揺れに揺れる中でシュトゥットガルトでヴュルテンベルク政府の再建に携わっていたエーミール・モルト（後にシュタイナー学校で有名になるヴァルドルフ・アストリアたばこ工場主）から⁴³⁾、1919年3月にはクルト・アイスナー殺害の後を受けてバイエルン政権の続行の責任を委ねられたヨハン・ヴィルヘルム・ミューロンから⁴⁴⁾、すぐに駆け付けて助力してほしいと要請されているが、いずれも、直接政治に参加することは自分の使命ではないという理由で断っている。

* * *

第1次世界大戦以前もヘッセは観念的には常に、精神は歴史的に発展し続けているもので

あることを信じていた。しかし、そのような精神に仕えることが、社会に対して本当に有効な自己定位となりうるかに関しては結局彼には自信がなく、半ば高踏的なポーズを取りつつ社会に背を向けて隠遁的に暮らし、閉塞への道を辿り続けて行ったのである。

世界大戦により政治的自己定位を迫られ、それだけでなくも危うかった彼の足場はがらりと崩れ落ち、精神分析の力を借りての内面凝視の厳しい自己実験により彼は辛うじて危機を乗り越えることが出来た。

彼の信ずるところによれば、内界には個人の歴史を遥かに遡る心象が刻まれており、夢の像を追って、姿を変じ続けて来た生物の進化の歴史をそこに読み取ることが出来る。常人はそのような魂の可塑性を認め得ず、人類を固定したものとみなし、保存の本能に駆られて大衆をなして行動する。それに対して精神に仕える人々の使命は現実政治に直接関わることでなく、現在においては未だ実現不可能と知りつつも人間についての新たな理想・理念像を描き、人類に未来への可能性を開くことなのである。そしてヘッセは、『데미アン』、『ツァラトストラの再来』等を執筆・発表することでそれを自ら実行しようとしたのである。

もっとも、進化論的ヴィジョンを通して自らを社会の中に進化の先行者・一種の予言者として位置付けるという発想法そのものは、おそらくヘッセ自身にとっても決して確信を持っているものではなく言わば「実験」のための手段だったのであり、1918年秋に妻の精神病が昂じて家庭が崩壊したことも加わり、戦後のヘッセの行路は決して一直線のものとはなり得なかった。しかし、この4～5年間の試練にあつて、自己変革・蘇生の可能性を追求し続け、自己という現象を個別性と普遍性とが共振し合える不特定の変数であり続ける存在として定立して行ったところこそ、ヘッセという作家が懐古的な郷土作家のイメージを超え出て人間の普遍性に迫る域に達し得た秘密があるのであろう。そして、こうした精神の進化・変貌のテーマをマクロコスモスのレベルまで広げて追求することが、『ガラス玉遊戯』まで続いて行くヘッセ文学の底流となるのである。

引用出典・参考文献

Hesse, Hermann: Gesammelte Schriften in 7 Bdn., Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1957.

(Abk.: GS)

Hesse, Hermann: Gesammelte Werke in 12 Bdn., Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1970.

(Abk.: GW)

Hesse, Hermann: Politik des Gewissens, Frankfurt a. M. (suhrkamp taschenbuch 656)

1981. (Abk.: PG)

Hesse, Hermann: Gesammelte Briefe, erster Band 1895-1921. Frankfurt a. M. (Suhr-

kamp) ³1990. (Abk.: GB)

- Apel, Ursula : Hermann Hesse, Personen und Schlüsselfiguren in seinem Leben, München (K. G. Saur) 1989.
- Ball, Hugo : Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk, Frankfurt a. M. (suhrkamp taschenbuch 385) 1977.
- Freedman, Ralph : Hermann Hesse. Pilgrim of Crisis, New York (Pantheon Books) 1978.
- 井手貢夫 『ヘルマン・ヘッセ研究 第一次大戦終了まで (新装版)』三修社、1980年
- Koester, Rudolf : Hermann Hesse, Stuttgart (Sammlung Metzler 136) 1975.
- Michels, Volker : Nachwort (1972). zu : GB1, S. 580-596.
- Mileck, Joseph : Hermann Hesse. Life and Art, Berkeley (University of California Press) 1978.
- Pfeifer, Martin : Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken, Frankfurt a. M. (suhrkamp taschenbuch 1740) 1990.
- Schwarz, Egon : Hermann Hesse, die amerikanische Jugendbewegung und Probleme der literarischen Wertung (1970), in: Volker Michels (Hrsg.): Über Hermann Hesse, zweiter Band, Frankfurt a. M. (suhrkamp taschenbuch 332) 1977. S. 79-98.
- Spycher, Peter : Eine Wanderung durch Hermann Hesses Lyrik. Dokumentationen und Interpretationen, Bern (Peter Lang) 1990.
- Stelzig, Eugene L. : Hermann Hesse's Fictions of the Self. Autobiography and the Confessional Imagination, Princeton (Princeton University Press) 1988.

注

- 1) 以下の叙述は主に »Zum Gedächtnis« (GS4 : 574-586, GW10 : 121-133)、および »Erinnerungen an Othmar Schoeck« (GS4 : 652-664)をもとにしている。
- 2) PG : 24, 38.
- 3) Mileck : 70.
- 4) 「イギリス式資本主義」を批判する発言をヘッセは繰り返し行なっている。例えば1915年9月に »März« に載せた »Apologie des Krieges« の段階でも、Max Schelerの »Der Genius des Krieges und der deutsche Krieg« を肯定的に評価しつつ、この戦争では「イギリスに由来する生命のない資本主義のもたらした破局」に対して戦うこと

が問題となっているのだ、と述べている。もっとも1年後の1916年暮れには彼はこの発言を撤回しているが。(PG: 85f.)

- 5) 例えば1914年12月26日付けの Volkmar Andreä (チューリヒ在住の音楽家で、ヘッセとは du で呼び合う仲) への手紙では、色々な感情が交錯して論旨一貫しないながらも、
„ Viel lieber als der Krieg ist mir das normale Leben der Herdenmenschen auch nicht, und viele von ihnen merken das jetzt auch und kommen aus den Schlachten heim mit der Sehnsucht, vernünftiger, schöner, besser zu leben als vorher. Wenn das so ist, dann bringt der Krieg am Ende auch Gutes.“ (僕にとっては、群をなして生きる連中の普段の生活だって、戦争よりそれほど好ましいものとは思えない。そして彼らの多くは実際また今それに気付いて、前よりはもっと理性的で素敵でより良い生き方をしようという憧れを抱いて戦場から帰って来ているのだ。そうだとすれば、戦争には結局のところ良い側面もあるわけだよ。) (PG: 52. なお、この論文中の翻訳はすべて拙訳である。) それ以後もヘッセは、戦争が実際に人の心にどのような変化を与えるかに興味を示し続け、兵士の精神状態を心理学的観点から描いた書物に強い関心を寄せたりもしている。(»Soldatenpsychologie«, in: »Neue Zürcher Zeitung«, 12. 12. 1915, PG: 157-161)
- 6) 最も代表的な例としては1915年11月5日に »Frankfurter Zeitung« に掲載された »Offener Brief an Bernt Lie« (PG: 136-140) を挙げる事が出来る。そこでは、中立公平の装いの下にドイツの宣伝政策の質の悪さを批判するノルウェーの作家に対し、敵国もまた同質の宣伝政策を行なっていると反論している。
- 7) Spycher : 236f.
- 8) 1915年6月よりその準備に着手。(PG: 74)
- 9) 帰宅して数日後の1914年10月15日の日記に、彼は旅行中の体験を生々しい思いをこめて綴っている。(PG: 36f.) 1915年1月11日付けの Liddy Gregori への葉書でも、あの旅行以来戦争の凄惨さに怖じ気を感じており、とても礼賛など出来ないと語っている。(PG: 56)
- 10) 開戦から1914年10月中旬までヘッセは克明な日記を残しているが、その最後に »Propyläen« の主筆 Eduard Angels の10月2日の手紙から次の文章が抜き書きされている。 „ In Ihren ferneren Berichten bitte ich nimmermehr Werke von französischen, englischen, russischen, belgischen, japanischen Autoren zu behandeln ; ich werde selbst das Beste und Schönste glatt totsichweigen und nicht bloß auf dem Gebiete der Literatur dieser Völker.“ (今後はもうあなたの原稿の中でフランス・イギリス・ロシア・ベルギー・日本の作家の作品は扱わないようにお願いいたします。

私自身、これらの民族については文学の分野に限らず、最も良いもの・素晴らしいものについてはまったく黙殺しようと思っています。) (PG: 37)

- 11) PG: 42-46, GS7: 44-49, GW10: 411-416. 初出は1914年11月3日の »Neue Zürcher Zeitung«. GS7には1914年9月執筆と記されており、多くの研究書もそれに従っている。しかし、その内容とヘッセの体験との対応を考えると、PGが「10月中旬執筆」としているのが正確と思われる。

Hugo Ballのヘッセ伝(Ball: 115-6)以来、あるいはそれ以前からかもしれないが、この『お友よ、この調べにあらず』がもとでヘッセは裏切り者として周囲から激しい攻撃を受けるようになった、と解説している研究書が多い。しかしそれは、Koesterも指摘しているとおり(Koester: 36)、事実合わない。ヘッセが1924年に執筆した »Kurzgefaßter Lebenslauf« に次のような下りがある。 „Im Jahr 1915 entschlüpfte mir eines Tages öffentlich das Bekenntnis dieses Elendes, und ein Wort des Bedauerns darüber, daß auch die sogenannten geistigen Menschen nichts anderes zu tun wüßten, als Haß zu predigen, Lügen zu verbreiten und das große Unglück hochzupreisen. Die Folge dieser ziemlich schüchtern geäußerten Klage war, daß ich in der Presse meines Vaterlandes für einen Verräter erklärt wurde — für mich ein neues Erlebnis, denn trotz vielen Berührungen mit der Presse hatte ich die Situation des von der Mehrheit Angespienen noch nie kennengelernt. Der Artikel mit jener Anklage wurde von zwanzig Zeitungen meiner Heimat abgedruckt, und von allen meinen Freunden, deren ich bei der Presse viele zu haben glaubte, wagten es nur zwei, für mich einzutreten.“ (GS4: 476f., GW10: 398f.) 「1915年のある日、私はこの惨めな気持を公に洩らし、いわゆる精神的な人間が敵を憎めと説教し、嘘を広め、この大きな不幸を高く褒めそやすことしか出来ないことに対する遺憾の言葉を述べてしまったのである。この相当怖ず怖ずと表明された不平の結果、私は祖国の新聞で裏切り者の宣告を受けたのである。これは私にとって新しい体験だった、というのは、新聞との接触は多かったけれど多数の人から唾を吐きかけられる状況には立ったことがなかったのである。その弾劾を含んだ記事は私の郷里の20もの新聞に転載され、そして、報道界にたくさんいると思っていた私の友人すべての内で、私を敢えて弁護してくれたのはたったの2人だけだったのである。」ここで挙げられている年号は正確であり、批判対象となったヘッセの文章は1915年10月10日に »Neue Zürcher Zeitung« に掲載された »Wieder in Deutschland« である。これに対する非難が10月24日の »Kölner Tageblatt« を皮切りにドイツの数多くの新聞に載せられ (PG: 118-20, 126)、さらにそれに対するヘッセ弁護が「2人の友人」Theodor HeussとConrad

Haußmann によってそれぞれ11月上旬に行なわれるのである (PG : 126-132)。1915年秋以前には、それほど目立ったヘッセ批判は行なわれていなかった。この間の成り行きについては Mileck が詳しく論じている。(Mileck : 68-77)

- 12) 1914年9月以来、ヘッセは »Bhagavad Gita« の読書体験を基にしつつしきりにこうした思想を展開させようとしている。(vgl. PG : 48f.)
- 13) PG : 54-6.
- 14) 1915年9月15日の »Leipziger Neueste Nachrichten« が »Der Krieg und der Dichter« (PG : 86-8)で取り上げて以来、ヘッセ批判が行なわれるたびに再三言及される。
- 15) PG : 97-102.
- 16) PG : 126-133.
- 17) PG : 107-111.
- 18) PG : 149-153. ヘッセと平和主義者の応答に関しても Mileck の考察は信憑性が高い。(Mileck : 75f.)
- 19) 平和主義者 Adolf Saager の公開質問状への応答(»Von den Pazifisten—Antwort auf einen offenen Brief von Herrn Dr. Adolf Saager« , PG : 176-8) の中でヘッセは、相手の言い分に一応耳を貸しながらも、次のような思想を表明している。„Daß diese großen Aufgaben für die Zukunft der Menschheit aber nur von ganz hervorragenden Einzelnen, nicht von Massenorganisationen wesentlich gefördert werden können, ist meine feste Überzeugung.“ (これらの、人類に未来に関わる重大な課題は、本質的には傑出した個人によってのみ推進されうるものであり、大衆の組織によってではない、というのが私の堅く確信するところなのです。)
- 20) GS4 : 574, GW10 : 121.
- 21) GB1 : 321.
- 22) Freedman : 184.
- 23) Pfeifer : 52.
- 24) GB1 : 323f.
- 25) vgl. Mileck : 113-8. また、Egon Schwarz は『デミアン』をも、部分的に Krankengeschichte として読み得る作品として挙げている。(Schwarz : 89)
- 26) GB1 : 353.
- 27) ヘッセの進化論的思想については井手賈夫氏が詳述しているが (井手 : 494-503)、ここではそれを参考にしつつも私なりの視点でまとめる。
- 28) »Auf einem nächtlichen Marsch«. GS5 : 556f., GW1 : 37f.
- 29) GS7 : 137-143. GW10 : 47-53.

- 30) GS7: 141, GW10: 51.
- 31) この着想に彼は書簡やエッセイなどで再三言及している。例えば1918年8月20日にベルリンの »Vossische Zeitung« に掲載された »Phantasien« (GS7: 152f., GW10: 63f.)。
- 32) 『戦争と平和』(»Krieg und Frieden«、1918年10月6日に »Gedanken« というタイトルで »Neue Zürcher Zeitung« に掲載された)でこの考え方が展開されている。(PG: 271-4, GS7: 117-20, GW10: 435-9)
- 33) 1918年1月21日付けの手紙(PG: 249-51)。ラーテナウは根本的な思想においてはヘッセと同様の基盤に立つと認めつつも、この手紙の後半でいずれあなたも観照から行動へ戻る日が来ますよと述べている。
- 34) 『戦争と平和』、PG: 273, GS7: 120, GW10: 438f.
- 35) GS7: 56-62, GW11: 191-7.
- 36) GS7: 62, GW11: 197.
- 37) 1917年1月3日、画家であり旧友の Hans Sturzenegger への手紙より。(GB1: 343)
- 38) Mileck: 79.
- 39) Michels: 592.
- 40) Stelzig は »Demian«について、「この作品における幻視的な想像力は、平和主義者のものではなく、そのまったく逆である。というのは、戦争による大量破壊は墮落した文化の蘇生のための必要な序曲として容認されているのである。」と述べ、その思想がナチのそれとも親近性を持ち得るものであることを指摘している。(Stelzig: 150f.)
- 41) »Soll Friede werden?«, 1917年12月26日執筆、12月30日 »Neue Zürcher Zeitung« に掲載。(PG: 243-7, GS7: 95-100, GW10: 421-6)
- 42) vgl. GB1: 377f.
- 43) GB1: 382, Michels: 592.
- 44) GB1: 391-3.

(北海道教育大学函館校講師)